

生徒の学習意欲を引き出し、書く力を高める、新聞を活用した学習指導のあり方

実践校指定第2年次 大町市立第一中学校 国語科

中山 実 濱野 眞美 友野里奈

1 本校のN I Eの現状

本校は昨年度、N I E〔新聞を教育に〕実践校の指定を受け、今年度は2年目となった。

一昨年度当初、作文用紙を配ると、「えー、何枚書くの」と言う言葉がまず出てきた。昨年度の全国学力学習状況調査からも、生徒には、書くことについて強い苦手意識が見られた。

さらに、夏休みの課題作文を見ると、誤字、脱字が多く、主述のねじれに気づかない生徒も多かった。中には、「～じゃないか」とか、「チョウ、ヤバイ」など普段の友達同士の話し言葉で表現したものさえ見られた。このことは、テストの解答や公立高校の志願理由書などでも同じ状況であった。

ところが、社会科での新聞作りや行事のまとめとして、新聞の形をとる学習になると、黙々と取り組む姿があった。その上、新聞の題名や見出し、文の配置や色遣いなどにも工夫を凝らして表現しようとする生徒もいた。国語科では、この生徒の姿から、「新聞づくりの学習」を「書く学習」に組み込めないかと考えたのである。

そこで、昨年度から、年間指導計画の中に、意図的に新聞の形式を取り入れた学習を組み入れることとした。その中で、適切な表現の仕方を学んだり、相手に伝える表現の工夫をしたりする活動をしてきた。各学年とも、2～3回の新聞製作を行っている。

その結果、昨年度の学習アンケートでは、普段の学習に意欲を見せなかった生徒たちが、「新聞を使った学習は楽しかった」と答えている。今年度に入ってからミニ新聞作りなどでは、「先生、さすが足りないです」などと意欲を示している。新聞作りが生徒の書く意欲を高めていると考えられる。

新聞記事は、毎日ほとんどの家庭に送られてくる活字媒体である。教科書教材よりも新鮮であり、様々な内容項目に及ぶ。事実を正確に伝えるという新聞記事の特性からみても、その利用や新聞作りは、生徒たちの興味関心を高め、書く力を高められる活動ではないかと考えられる。相手に正確に事実を伝える表現手段でもある新聞を、国語科の授業の思い切った見直しの一手段として利用しようとした。

2 N I Eで高めたい力（育てたい力）

- ・新聞にふれて、新聞を知り、新聞を読もうとする生徒

教師からの話題提起、スクラップ、新聞記者さんとの出会いなど

- ・新聞で遊びながら、様々な表現の工夫があることを知り、語彙を身につけていく生徒

4コマ漫画、興味ある欄、見出しの違い、音読、書き取りなど

- ・新聞に学びながら、情報を獲得し、思考し、活用しようとする生徒

複数紙の比較をする、事件の顛末を追う、社会問題を知る、批判的に読もうとするなど

- ・新聞を作りながら、読み書き能力を高め、わかりやすく表現しようとする生徒

事実を正しく伝える、自分の思いを伝える、友の思いを分かり合う、新聞に関わる人に

つながるなど

3 研究の概要

(1) 実践した教科

- ・国語科（中心的な教科）、社会科、総合的な学習

(2) 新聞の提供状況

昨年8月下旬より4紙、11月から7紙が学校に届き、図書館前に設置した。（公務員さんに新聞をつづるための新聞ばさみと新聞ばさみ掛けを作っていただいて）今年度は、普通教室棟2階の談話スペースに丸テーブルを置き、4月当初より2紙を置いた。2ヶ月間は7紙が置かれた。呼びかけの言葉や日報での紹介、日曜版の掲示等を行った。

新聞協会からの提供期間終了後、大町市からの特色ある学校づくり支援基金を利用して、3月末まで、4紙を図書館に置いている。

新年度も引き続き「特色ある学校づくり支援基金」を利用して、必要としている生徒が毎日新聞に触れられるように、図書館に新聞掲示の場を設ける予定である。

(3) 新聞を取り入れた授業をする上で特に工夫をしたこと

- ① 一教員の活動でなく、教科会として全校で取り組む学習活動であることから、国語科の年間カリキュラムに新聞づくりの学習を位置づけた。
- ② 他教科や学年行事のまとめが新聞づくりの形で定着したこと。
- ③ 基礎的な学力の育成や新聞に関わる環境作りとして、学校選択国語の時間を確保し、新聞コラムの書き取りを位置づけたこと（昨年4月から。）
- ④ 新聞記者を外部講師として、国語の授業の中にTTとして参加していただくこと。

(4) 新聞記事の持つ価値の受け止め

国語科の視点から

ア 憶測でなく、事実が明確に伝わる。	カ 誤字、脱字がない。
イ だらだらせず、適切な長さの文である。	キ 語彙の獲得、増加につながる。
ウ 要点を端的に示している。	ク 根拠が合つての主張である。
エ 構成が明確である。	ケ 即時性、多様性という特長を持つ
オ 主述のねじれがない。	コ 事件の発端から終末までがある

新聞社（記者）の記事作りの基本＝3C（明瞭、正確、簡潔）

- ① 5W1Hが明確である。
- ② 要約文から（リード文もしくは第一段落）始まり、構成が明確である。
- ③ 話題が新鮮であり、内容が多方面にわたる。
- ④ 伝え手の意図があり、伝え方が表現となって表れる。（見出し）
- ⑤ 端的で、無駄な修辭が少ない。
- ⑥ 漢語が少なく、一読して意味をとらえやすい。
- ⑦ コラムなど、慣用句や専門的な言葉なども遣われている。

* 生徒は特にその新鮮さや話題の豊富さに惹かれている。（アンケートから）

(5) 新聞作りの学習の価値の受け止め

次の①～⑧のように、新聞製作の過程は、「書くこと」の指導事項そのものでもある。さらに、新聞は、事実を正確に相手に伝えることを第一義としていることから、意義ある学習活動であると考え。また、総合的な学習や社会科の学習などでも利用され、生徒の抵抗感が少ない。さらに、多くの人に読んでもらえることは、作り手の意欲を高めることにつながる。

- | | | | | |
|-----------------------|---------------|-----|------|-------|
| ①テーマ、課題の設定 | ②取材、集材 | ③調査 | ④下書き | ⑤構成編集 |
| ⑥見出し（主題、主張）、リード文（要約文） | ⑦表現の工夫、推敲（清書） | ⑧発表 | | |

4 具体的な実践

（１）コラム視写や環境作り

① 授業最初に５分間書き取りをする。視写できた字数を数え、記録して終了する。生徒が音読をし、難語句や漢字については教師が板書する。（慣用句や学校の中ではあまり遣われない表現について辞書でその意味を確認する）５分間の書きとりに集中することで、落ちついた授業のスタートが切れるようになった。

このコラム視写を続けることにより、生徒は、「字数が増えることで文章を速く読むことができるようになった」と実感した。（現３年生の字数平均は、開始当初＝およそ１５０字→１月＝およそ１７０字→６月＝およそ２００字→１０月＝２２０字超）本年度行われたアンケート結果から、黙読が早くなり（５０％）漢字も身につけてきている（４５％）と実感している生徒の姿を見て取ることができる。

全国学力検査において、本校生徒の得点は全国平均より低い。しかし、漢字の読みは、上回っている数少ない項目の一つである。

② コラムや社説等を利用したドリル学習

- ・指示語の抜き出し・小見出し付け・一枚の写真から・見出し比べ・４コマ漫画の吹き出し
- ・要約練習・見出しを考える・意見の投稿５００字作文（信毎投稿欄に３名掲載）

③ 選択国語の学習における切り抜き新聞作品コンクールへの挑戦

④ 社会科における新聞作りや新聞切り抜き学習

⑤ 新聞の形にまとめる活動

昨年から、学年行事や総合的な学習のまとめとして新聞の形にまとめる活動が、どの学年にも定着した。

- ・キャンプ新聞・登山新聞・職業体験学習のまとめ・進路学習 等
- ・社会科、総合的な学習

《コラム視写や環境作りから見えてきたもの》

- ・新しい話題を楽しみにする生徒が見られる。
- ・静かに集中できる時間であり、自分の成長が数字的にも見える学習である。
- ・コラムからは、子どもたちが言葉そのものや言葉の意味、使い方などを知り、語彙が増える。
- ・速く書けるようになるのはもちろんだが、読みも速くなっている。
- ・家で新聞を読む生徒が増えている。（学習の前と比べて）

１，２年＝６６％ ３年７７％が読むようになったと答えている。

- ・毎日置かれた新聞を読む生徒が出、記事がほしいという生徒も出てきた。
- ・社会面や世界の話、地方のニュースに目を通す生徒が見られるようになってきた。

(2) 昨年度の単元学習の実践から

① 3年生の修学旅行新聞づくり

教科書単元「社会をとらえる」の中で、新聞の特長を生かしながら、自分たちの修学旅行の体験を記事にして伝える活動であった。文字数2000字ほどになるB4版の新聞形式FAX 原稿用紙を基準にした。4ミリ原稿、5ミリ原稿を用意して生徒に選択させた。

(5ミリ方眼では1500字ほどになる)教科書作品も参考に、構成や見出し、リード文の意味などを押さえながら作成させた。自分が体験した出来事の中から伝えたい内容を整理し、要点をまとめた結果、明確な構成で記事を書くことができた。同様に、見出しについても端的で、読み手に伝わりやすいものをつけることができた。多くの生徒が右に挙げた新聞のレイアウトのように、読みやすさの基本である対角線上に見出しや写真を配置することができた。自分が体験したことなので、話題が新鮮で伝え手の意図がしっかりしており、書く力をつける題材として価値のある学習であった。



生徒作品「京都へおこしやす」

② 2年生の古典新聞

古典単元での発展学習として、新聞づくりを行った。

「枕草子」もしくは「徒然草」のどちらかを選択し、教科書掲載段以外の段を題材とした。

その読みや意味内容を確認し、清少納言や兼好法師の見た事実やそれに対する思いを現代文にして新聞形式で書き表す活動である。この2つの教材は随筆文である。筆者の目の前に展開されている事は、当時の生活様式や文化をあらわしたものである。さらに、そのことについての兼好や清少納言の感じ方をとらえて、その事実を伝えること、そこにコラムの形式で自分の感想を要点的に書くことを目標とした。「徒然草新聞」のほぼ中央に全体の内容の見出しを大きく配置した。D生は、ノートにマッピングしてから書きはじめたため構成が明確である。また、主述のねじれも少なく、完全な5W1Hとまではいかないが、それに近い書き方になった。このようなことから

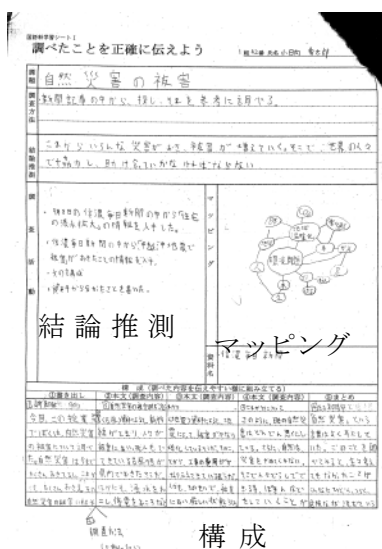


見ると、事実を正確に伝えるために新聞形式を意識して書いたことは、より文章を練り直して端的に書く意欲につながると考えられる。

③ 一年生の環境レポート

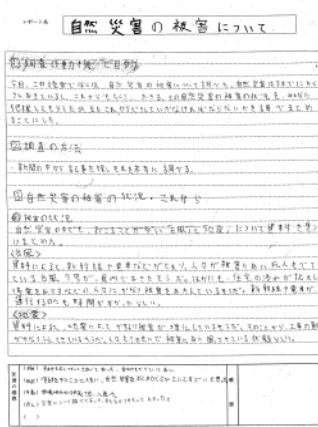
「真実を語る」という単元の中で『未来をひらく微生物』という説明文を学習した後に、「環境問題」をテーマにレポートを書いた。その資料として、『環境』に関わる各自のテーマに向けて集めておいた新聞記事を使った。

新聞記事から課題を持ち、集材し、調べ活動を行い、マッピングをしていくなど、手順を確認しながら学習を進めた。生徒たちは意欲的にそれらの活動に取り組み、充実したレポートが期待さ



構成

D生の徒然草新聞



結論が消え、根拠となる材料も、繋がりがなく、減らされてしまった。訴える物がなくなっている。

れた。

だが、いざレポートにする段になったとたん、つながりに欠ける、ちぐはぐな文になってしまうものが目立った。

上記左の学習カードは、手順を追って進められた。それなのに、上記右のレポートの実際になると、O 生は、根拠を減らしてしまい、結論が曖昧になってしまった。

教師は、新聞記事に調査の裏付けをさせ、順序だった繋がりのあるレポートを期待した。しかし、書くことでは上位生である O 生でも、項目を並べて書くことの方に意識が向いて、混乱してしまったのかもしれない。教科書にある、レポートの形にまとめようとする意識が強すぎたために、かえっ

て、読み手には書き手の意図が伝わらない中途半端な物になってしまったようだ。このような生徒が多かった。また、全体の構成を見通せず、ただ調べたことを羅列してしまったものや主述のねじれに気づけない生徒も見え、基礎的な文の書き方を再確認する必要性を感じた。

项目的な述べ方を、伝えたいことを短いことばで表現する方法（見出し）とすれば、その中身にも調べたことが生かされたのではないかと思われた。また、基礎的な文章の書き方についての学習の必要性を改めて感じた。

（３）今年度の実践

① 国語科の授業の中での新聞作り（昨年度からの継続＝別紙年間指導計画参照）

昨年度の実践もふまえ、どの学年にも新聞作りをする単元を設定した。

二年生の学習計画に、説明文の読み取りを深めるための「モアイ新聞作り」を組み入れた。

・作文に苦手意識が強かったが、新聞形式にすると、意欲の高まりが見られる
・書くことの基本の定着が弱いと見られる（全体の構成、主述のねじれ、話し言葉、だらだら文等）

← このような生徒が

・実際の新聞記者さんから記事の作り方やエピソードをお聞きする。
・新聞記事と読み比べて、文章の書き方の基本を確認する。

← このような手だてで

・作文に対する苦手意識がなくなる。
・読み手に事実を正確に伝えようと工夫する。
・意欲的に構成を考え、筋の通った文を書こうとする。

← こうなるだろう

② 授業の中での新聞記事の利用

ア 新聞記事を利用したレポート 公開授業

単元「真実を語る ―調べたことを伝えよう―」において、「未来をひらく微生物」の学習の後、学習の根拠を新聞記事に求めさせての環境新聞作り

イ 新聞社からの支援の利用

新聞記者を進路学習の講師として招いたり、授業に関わっていただいたりする。

10月20日（月）1学年、2学年 学年授業、「新聞の特徴や作り方」

講師 信濃毎日新聞社 読者センター次長 畑光一氏

5 公開授業

日 時 平成20年11月17日(月) 第5時(14:20～15:10)

授業学級 1年2組(40名) 授業者 友野里奈 教諭

指導者 信濃毎日新聞社NIEアドバイザー 江澤啓二 先生

(1) 単元名 「真実を語る」

(2) 教材名 「調べたことを正確に伝えよう～新聞にまとめる～」

(3) 単元目標

- ① 「未来をひらく微生物」の文章の構成や例示のしかたなど、事実を正確にわかりやすく伝えようとする工夫を読み取ることができる。(読むこと)
- ② 文章の構成や表現方法に着目して記事を読んだり、事実がわかりやすく伝えられているまとめ方を学んだりすることによって、文章の書き方の理解を深めることができる。(読むこと)
- ③ 新聞記事から「環境」に関わる情報を集め、事実をわかりやすく伝えられるようにまとめることができる。(書くこと)

(4) 単元の展開(時間扱い)

段階	学 習 活 動	指 導	評価	時間
一 次	○教科書教材「未来をひらく微生物」を読んで段落の役割を知り、文章構成を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・文章中の重要な語句の意味を正しくとらえさせる。 ・段落の役割に着目して文章を読むように促す。 ・マッピングを行い、構成や筆者の表現方法の工夫に着目できるようにする。 ・微生物と環境との関係を理解し、身の回りの環境問題に目を向けるように促す。 	5-(1)	5
二 次	○環境に関わる問題から課題を絞り、新聞記事から集材し、事実をわかりやすく伝えられるようにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で同じ取材メモを扱い、事実をまとめる記事を書かせる。 ・別の記事の例文から事実を正確に伝える書き方のコツをつかむように明確に板書を整理する。(本時) ・確認したコツをもとに、自分が書いた記事の校正を行い、友達や記者が書いた記事と比較させ、相手に伝わる文章になったか確認する。 ・環境新聞を書くために、自分の調べる課題に合わせた記事の集材、選材、調べ学習を行い、書くネタを集めることを確認する。 ・マッピングを行い、段落の構成を考えさせる。 	5-(2) 5-(3) 5-(4) 5-(5)	12

		・自分の課題に関して、調べた情報を取捨選択し新聞にまとめることを確認する。	5-(6)	
三 次	○完成した新聞をグループで読み合い、わかりやすく伝えられているかを評価し合う。	・類似の課題設定を行った者同士で新聞を相互評価させ、事実が正確に伝わった文章が書くことができたかまとめをする。	5-(7)	1

(5) 単元の評価規準

- ①微生物と環境の関わりに興味・関心を持って文章を読み、段落の役割や筆者の表現方法を把握しようとしている。(読むこと)
- ②事実を正確にまとめている。(書くこと)
- ③2つの文例を読み比べて、事実を正確に書くためのコツを見つけようとしている。(読むこと)
- ④自分の書いた記事と友達や記者さんが書いた記事を比較し、より相手に伝わりやすい文章に校正しようとしている。(書くこと)
- ⑤課題に合わせた新聞記事の情報を集めて、課題に必要な材料を取捨選択している。(読むこと)
- ⑥事実の書き方や効果的な表現を使って明確に書こうとしている。(書くこと)
- ⑦わかりやすく伝えるための書き方の工夫に着目して、相互評価をしようとしている。
(読むこと、話すこと・聞くこと)

(6) 本時案

① 主眼

共通の取材メモを使って記事を書いた生徒たちが、読み手に正確に伝えることの大切さを考えるために、新聞記者の自身が書いた記事の体験エピソードを聞いたり、別の内容の記事の2つの文例を読み比べたりすることを通して、事実を正確に伝えるための書き方のコツを見つけることができる。

② 本時の位置 1 8 時間目中 8 時間目

前時：全体で共通した取材メモを扱い、事実の記事にまとめる。

次時：全体で確認した書き方の観点をもとに、自分が書いた記事の校正を行う。

③指導上の留意点

2つの記事を読み比べる時に、まず教師が音読する場面では、違いに気づけるような読みの工夫をする。

(7) 展 開

段階	学習活動と予想される生徒の反応	教師の手だてと支援・評価	時	備考
課	1 新聞コラムを視写する。 2 本時の学習内容を把握する。 【学習問題】 どんなところに注意して書けばいいのだろう。	・5分間の合図をする。難読語句を板書する。段落ごと一人ずつ音読をさせる。 ・前時で自分たちが書いた記事が読み手に 正確に伝わるか問う。	12	

題 把 握	3 新聞記者から自身が書いた記事 についてのエピソードをお聞きす る。 ・読み手に誤解を与えてしまうこと があるんだ。 ・正確に伝えることって大事なな。	・記者さんのエピソードをお聞きした ことから、相手に正確に伝えることの 大切さを生徒に想起させる。	13	学 習 カ ー ド
	【学習課題】 事実を正確に伝える記事の書き方のコツを2つの記事で検証しよう。			
追 究	・2つの記事にはどんな違いがある のだろう。 4 各自で気付いたことを学習カー ドに書き出す。 ・①と②が逆になっている。 ・「だれが」「何を」したのか分か らない。 ・下の②は一文が短くてわかりやす い。 ・事実を伝えるのに、感想が入って いる。 ・「～じゃないか」は新聞記事には ふさわしくないと思う。	教師が音読をし、まずは音声言語で伝 える。 ①のまとまりから気付かせたいこと ・話題の中心は何か？ ← 伝えたいことを先に書く。 ②のまとまりから気付かせたいこと ← ・一文の長さ ・一文に主語述語が二つ以上入ると伝 わりにくくなる。 ③のまとまりから気付かせたいこと ・「私」とは誰か？事実を伝える文章 に自分の考えが混同している。 ・話し言葉が使われていること。	10	
	5 全体で書き方のコツを確認する。 ・話題の中心（伝えたいこと）を一 番先に書く。 ・一文は短く。 ・一文の中に主語、述語は一つ。 ・事実と感想を分ける。	なぜわかりやすい文章なのかに気付 くことができたか。 ・気付いたことを整理し、端的で明確 なコツを板書する。	10	
ま と め	6 本時のまとめとして、感想を発 表する。	・次回の学習予告をする。	5	

（8）実証の観点

- ① 新聞記者から体験エピソードをお聞きしたことは、生徒が課題を持つことに有効であったか。
- ② 2つの文章を読み比べたり、教師が明確に書き方のコツを板書したりしたことは、事実を正確に書くための文の構成や文章表現に気付くのに、有効であったか。

（9）授業の反省と課題

- ・自分が書いた記事を推敲することは、生徒たちにとってなかなか難しいと感じた。授業研究会でもだされたように、推敲するポイントを絞ったり、色分けをして推敲したりする工夫が必

要であった。

- ・研究授業後の授業では、2つの記事を見比べて、推敲するポイントがわかるような学習を仕組んでみた。本時での新聞記者が話してくださったエピソードやコツを思い出しながら、2つの記事を比べた活動を行い、生徒のつぶやきや活動の様子から推敲を行う学習が定着しつつあると感じた。

- ・以上のような学習を行った結果、環境新聞の記事の書き方も、事実を正確に伝えようとする文面が見られた。

- ・課題としては、事実だけではなく、自分の考えにも迫れる文章を書く学習に発展させていきたい。コラム記事を書く学習は、これからも積み重ねていきたい。

6 研究のまとめ

- ・「作文」という言葉に抵抗を感じずる生徒が「新聞を作る」とした方が意欲をもてる。
- ・新聞記事は、科書文より新鮮な印象を与えるために、短時間の学習に生かすことができる。
- ・新聞記事は、簡潔で明確な文章を書くための教材としても、効果的である。
- ・新聞記者の助言は、T Tとして有効な手段となりうる。
- ・コラム書き取りや音読みは、続けることで、効果が上がる。

7 課題と方向

(1) N I E利用の継続

新鮮な情報に触れ、より広い視野を求めるためにも、読み、書く力を高めるためにも、授業開始時の「コラム視写一音読」を続ける。また、家庭学習にもつなげる。

(2) 新聞づくりの学習を定着させるためのカリキュラムの見直し

新聞づくりには、時間がかかる。年間を通して学習単元の精選をし、ひとつ一つの単元の充実を図りたい。

(3) 特色ある学校づくりの一貫として

市からの「特色ある学校づくり」支援をいただいて、新聞が毎日生徒の目に触れられるよう工夫していくことで、2年間の実践が生かされる学習活動としたい。